

日本戦没学生の手記「きけわだつみのこえ」第1集 (特に印象に残る記述の一部抜粋転記)

人間にとって一国の興亡はじつに重大なことでありますが、宇宙全体から考えた時はじつに些細なことです。

頭に浮かぶものは愛らしい子供、妻、父、母、妹等々。門出の前夜「私を未亡人にしてはいや。」と言ったきみの顔が、目が、忘れられない。

先週の日曜日、やはり便所の中で、母へ手紙を書いた時は涙がとまりませんでした。母には元気で張り切っているとは書きましたが、僕の気持は死人同様の悲惨なものです。

こんな手紙を書いたのを二年兵にでも見つければ、おそらく殺されるでしょう。
他人から来た封書は、その差出人の名を記入されます。

人間こんなに自由にあこがれるとは。

自由主義が、社会思想として世にある害毒を過去に流したことは事実であろうか。人間の本性としてFree-domにあこがれるという真実さを、兵營に来て初めて、身にしみて知った。

「生きたい」とこれほどまでに考えつつ死に直面した時の苦痛は、思いみるだに顔をそむけたくなるほどぞっとするものであろう。

国家とは果たして人類にとって必然的に生じなければならぬ社会団体なのだろうか？ ただ歴史的に存在していたから今なお維持されているというにすぎぬのではあるまいか。

国家生存という、否幾百万の日本人の生存の前の個人的犠牲、あんがい冷たい目で見られる。しかしあの中には夫の、父の、兄の出征によってすでに路頭に迷っている妻や子があるであろう！

国家はかかる個人的犠牲に対して全然盲目であっていいのだろうか？ 今の社会政策、それで十分なのだろうか？

元来病弱であった俺まで兵隊としてかり出さねばならぬほどの帝国だろうか、そして病気になった自分に対して果たしてどれだけの方策をとってくれたか。

死ぬのは簡単だ。しかし死ぬことのできぬ理由がある。生を享けた以上最後のドタン場まで生き抜けねばならぬ。

東条首相という男はひげを生やした浅蜷のような顔をしています。この介殼のなかで歴史の虹が織られるのです。東条は詩人だということになるのでしょうか。可々（口偏に可）。（大笑いの意味をふくむものと思われる。）

ただ一人の息子——その成長ばかりを願ってきた母は、わが子をみすみす戦場に死なせるのはけだし“願わざるのはなはだしき”ものであろう！ この憂いその心配はまるで狂気のごとく、母としてはほとんど泣かんばかりの真剣な態度で自分に哀訴するのであった。説き去り説き来たりためつなだめつ一生懸命説得するのであった。（中略）今や母の本能は鋭敏に我が子の血の匂いを嗅いでいる！ 的確に“死”の予想をしていたようであった。（中略）……お母さん、お気持はよくわかります。しかし時代とわれわれの教養がお言葉にそうのを許さないのです。どうぞ先立つ不孝はおゆるしくください。……

率直に言うならば、政府よ、日本の現在行っている戦いは勝算あってやっているのであろうか。いつも空漠たる勝利を夢みて戦っているのではないか、国民に向かって日本は必ず勝つと断言できるか。いつもこの断言のためには非常な無理に近い条件がついているのではないか。

ファシズムとは青年にありやすき一時の興奮である。冷静に落ち着いて秩序を正すべし。百年の後に悔いを残すなかれ。今日本は興奮している。

真の平和をいうならば、武力の戦が終わっても、資源戦、経済戦など結局人類の滅亡まで、平和は到来しないであろう。最近の書物にちよいちよ見られるのは戦争の倫理性ということである。戦争の倫理性なんてあり得るものであろうか。人を殺せば当然、死刑になる。それは人を殺したからである。戦争はあきらかに人を殺している。その戦争を倫理上是認するなんて。いったい倫理は人を殺すことを是認するのか。大乘の立場、大乘の立場と強調される。大乘の立場から戦争をみるならなぜ人を殺さんでもよいようにしないのか。人を殺している間に大乘、小乗などの区別はあるものか。すべて悪である。

いやしくも一個の、しかもある人格をもった「人間」が、その意志も行為もいっさいが無視されて、尊重されることなく、ある一個のわけもわからない他人のちょっとした脳細胞の気まぐれな働きの函数となって左右されることほど無意味なことがあるでしょうか。

日本人の死は日本人だけが悲しむ。外国人の死は外国人のみが悲しむ。どうしてこうでなければならぬのであろうか。なぜ人間は人間で、共に悲しみ喜ぶようにならないのか。平和を愛する人。……私のようにいくじなしの者にはこんな言葉が痛切に感じられてならない。

外国人であるがゆえにその死を日本人が笑って見る。これは考えてもわからない。

星の世界から望遠鏡で見るとすれば、傑作な芝居が展開されているのだ。

人間の獣性というか、そんなものの深く深く人間性の中に根を張っていることをしみじみと思う。

人間は、人間がこの世を創った時以来、少しも進歩していないのだ。

今次の戦争には、もはや正義云々の問題はなく、ただただ民族間の憎悪の爆発あるのみだ。

敵対しあう民族は各々その滅亡まで戦をやめることはないであろう。

恐ろしきかな、あさましきかな

人類よ、猿の親類よ。

毎日多くの先輩が、戦友が、塵埃のごとく海上に、ばらまかれて、——そのまま姿を没していく。一つ一つの何ものにもかえがたい命が、ただ一塊の数量となって処理されていくのである。

もうすぐ死ぬということが、なんだか人ごとのように感じられます。いつでもまたお母さんにあえる気がするのです。あえないなんて考えるとほんとに悲しいですから。

第二、もうしばらくこの世にあれば何かおもしろいこと、快ニュースがあるだろう。ヒョットして俺が今度戦争で死んだ最後の一人になっては、馬鹿臭いという気持。

はっきり言うが俺は好んで死ぬんじゃない。何の心に残るところなく死ぬんじゃない。国の前途が心配でたまらない。いやそれよりも父上、母上、そして君達の前途が心配だ。心配で心配でたまらない。

書きたいことがあるようでないようで変だ。

どうも死ぬような気がしない。ちょっと旅行に行くような軽い気だ。鏡を見たって、死相などどこにも現われていない。

空の特攻隊のパイロットは一器械にすぎぬと、一友人が言ったことは確かです。操縦桿をとる器械、人格もなく感情もなく、もちろん理性もなく、ただ敵の航空母艦に向かって吸いつく磁石の中の鉄の一分子にすぎぬのです。理性をもって考えたならじつに考えられぬことで、強いて考えれば、彼らが言うごとく自殺者とでも言いませうか。精神の国、日本においてのみ見られることだと思えます。

あきらめきれない秒時計の針がまわってゆく。

私の突撃の時を動きのとれない時と、それでもそっと恐れていることもあるのだ。

美しくも清き富士、郷土愛、民族愛が祖国愛たることならば人後に落ちない。だが、ただ過去の歴史、国体のために戦うのはどうしても割り切れぬ。人間の悲惨は天皇では救えぬ。

さらに考えをいたせば、満州事変以来の軍部の行動を許してきた全日本国民に、その遠い責任があることを知らねばならない。

万事にわれが他よりすぐれたりと考えさせたわれわれの指導者、ただそれらの指導者の存在を許してきた日本国民の頭脳に責任があった。

吸う一息の息、吐く一息の息、食う一匙の飯、これら一つ一つのすべてが今の私に取っては現世への触感である。昨日は一人、今日は二人と絞首台の露と消えていく。やがて数日のうちには私へのお呼びもかかってくるであろう。それまでは何の自覚もなくやってきたこれらの事が、味わえば味わうほど、このようにも痛切なる味を持っているものであるかと驚くばかりである。口に含んだ一匙の飯が何とも言い得ない刺激を舌に与え、溶けるがごとく喉から胃へと降りていく触感を、目を閉じてジッと味わう時、この現世の千万無量の複雑なる内容が、すべてこの一つの感覚の中に込められているように感ぜられる。泣きたくなることがある。しかし、涙さえ今の私には出る余裕はない。極限まで押し詰められた人間には何の立腹も悲観も涙もない。ただ与えられた瞬間瞬間をありがたく、それあるがままに享受していくのである。死の瞬間を考える時には、やはり恐ろしい不快な気分押し包まれるが、そのことはその瞬間が来るまで考えないことにする。そしてその瞬間が来た時は、すなわち死んでいる時だと考えれば、死などはあんがいにやさしいものなのではないかと、みずから慰めるのである。

しかし国民はこれらの軍人を非難する前に、かかる軍人の存在を許容し、また養ってきたことを知らねばならない。結局の責任は、日本国民全体の知能程度の浅かったことにあるのである。

天皇の名を最も濫用、悪用したのも軍人であった。

人間というものは死を覚悟しながらも、絶えず生への執着から離れきれないものである。

いよいよ私の刑が執行せられることになった。戦争が終わり戦火に死ななかった生命を、今ここで失うことは惜しんでもあまりあるが、大きな世界歴史の転換のもと、国家のために死んでいくのである。よろしく父母は、私は敵弾にあたって花々しく戦死を遂げたものと考えて、諦めてください。

降伏後の日本はずいぶんと変わったことだろう。思想的にも政治経済機構的にも、ずいぶんの試練と経験と変化とを受けるであろうが、そのいずれも見ごたえのある一つ一つであるに相違ない。その中に私の時間と場所が見いだされないのはまことに残念だ。しかし世界の歴史の動きは、もっともっと大きいのだ。私ごとき者の存在に一瞥もくれない。大山鳴動して踏み殺された一匹の蟻にしか過ぎない。

このごろになってようやく死ということがたいして恐ろしいものではなくなった。決して負け惜しみではない。病で死んで行く人でも、死の前になればこのような気分になるのではないかと思われる。でも時々ほんの数秒間、現世への執着がひょっこり頭を持ち上げるが、すぐ消えてしまう。このぶんなら、たいして見苦しい態度もなく死んでいけると思っている。

音もなく我より去りしものなれど書いて偲びぬ明日という字を